

## 令和元年度 板橋区青少年問題協議会（第一回専門部会）

開催日時 令和元年 7 月 25 日（木） 午後 6 時 30 分～

開催場所 板橋区役所南館 6 階 教育支援センター研修室 A B

### 出席者

東京家政大学人文学部教授	平 戸 ル リ 子
法政大学キャリアデザイン学部教授	児 美 川 孝 一 郎
教 育 委 員	松 澤 智 昭
区立小学校校長会	浅 見 智 則
区立中学校校長会	関 実 子
民生・児童委員協議会 主任児童委員部会長	島 村 恵 子
NPO 法人青少年自立援助センター	山 本 依 里 子
フリースクール@なります代表	久 保 正 敏 子
地域教育力担当部長	松 田 玲 子

### 出席職員（幹事）

板橋福祉事務所長	浅 賀 俊 之
指導室長	門 野 吉 保
地域教育力推進課長	諸 橋 達 昭
大原生涯学習センター所長	的 野 信 一

### オブザーバー

東京都教育庁地域教育支援部主任社会教育主事	梶 野 光 信
教育支援センター所長	平 沢 安 正
成増生涯学習センター所長	齋 藤 真 哉
社会教育指導員	戸 張 隆 次

## 【開会】

- ・挨拶
- ・資料確認
- ・専門部会進行説明

## 【議事1】グループ討議

### 研修室Bグループ

#### 児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）

最初に頭の中の整理として先ほどもご説明いただきましたが、もう一度確認しますと、今回は不登校と高校中退についてそれぞれどうしようかということで始まったと思うのですけれども、昨年度の場合は専門部会では問題別に不登校の部会、高校中退の部会と分けて討議をしました。今年度は提言の作成に向けてというので不登校と中退を別々に捉えるのではなくて一体的に考えようということで、それぞれ多様なところに原因がありますけれども、同時に重なるところもあるため、あるいは発達の時系列でいうと何らかのかたちで不登校の経験者が高校になって中退していくということもあるのではないかとということで、そこを一体的に捉えようということです。前回の全体会で提言に向かう大きな方向性としては3つありますよと、1つ目はさきほどご紹介にありました居場所ということ、どう捉えてどんなふうに作っていけるかということ、2つ目が多様な進路選択の機会をどう保障するかということ、それがこちらにお集まりになった皆さんですけども、3つ目が東京都など他の機関との連携を含めて考えていこうという話です。3番目については今日は触れないということで。要するに2班に分かれて、向こうの研修室Aでは居場所の拡充という議論をされて、我々の方では多様な進路選択の機会の保障として、特に中学から高校への進み方、進路選択の仕方ということと中途退学は密接に関わっていると思うので、その辺を解きほぐしていけるようなより有効な進路機会の保障の仕方があるだろうかという、そんな議論ができればと私自身は理解しているのですけども。そういうことでよろしいでしょうか。要するに進路選択の機会のことについてこれから45分議論していきたいということですが、中途退学だけを念頭に置いているわ

けではないのですが、一体的な問題として、主として高校入学後に現れる問題の背景として、中学校から高校へ進学する際の不本意入学、不本意じゃなかったけれども行ってみたらやっぱり合わなかった、という子も当然いるでしょうし。本来、中学生時代までに届いているべき必要な情報がそのお子さんや保護者の方に届いていないみたいなこともあるでしょう。進路選択の機会っていうのはちょっと幅広く捉えてみて、いろんなことも含めて議論して構わないと思うのです。そういうことでいきたいと思います。

### 松澤委員（教育委員）

昨年までは不登校のグループに参加させていただき、今年はこちらに参加させていただくのですけれども、先ほど先生がおっしゃったように、中途退学の問題というのは不登校の影響を受けているという話をされていたので、掘り下げて考えてみたところ、家庭ですとか先程の進路選択問題ですとか、そういったところに非常に根があるのではないかというふうなところの視点だけですけれども。私も高校1年生に5年間、私立高校だったので授業を1時間だけさせていただく機会があって、その際に将来の夢・進学・仕事について全員から聞いてみたのですが、中学から進学している生徒さんと高校から進学している生徒さんとでだいぶ違いがありました。中学から私立に入っているお子さんは夢が決まっているケースが結構多くありまして、高校から入ると高校に入ったばかりで決まってないケースというのがすごく多かったです。また、その先の進路や将来を決めるということから、高校に来て何がしたいのかということ質問しました。そういったこともありまして「じゃあ死ぬまでに何をしたいのか」という長いスパンで考えたとき、意見が出る子と出ない子で差があったことに1番衝撃を受けました。意見がでない生徒というのは、僕が話しているその1時間をもやもや眺めている、出てくる生徒というのは僕の話にどンドンついてくるなという感じを受けます。最後に授業を1時間やった子どもたちからの直接的な手紙というのをいただくのですが、毎年その手紙を見るとモヤモヤしていた子なのに意思を持っている子が多いです。ですから、みんな

なの前で表現ができてないだけなのかなと、本当はどっかで思っているけどそれをいえない環境や家庭であったり、中学校時代だったり、もっと発言して自分のやりたいことを言って、それに向かって進むという方向性を見出せる何かやり方があれば、それは解決できるんじゃないかなと思いました。

### 児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）

進路選択は別にどの高校を選ぶかということだけではなくて、そもそも何のために高校に行くのか、将来に向けたその子なりの目標とか目当てがどこら辺にあるのか、そういう視点がすごく大事だと思います。そういったことも含めて、我々が議論すべきなのは高校の情報やそのための情報交換会や説明会をどうするかという話だけでは矮小化された話になっちゃうのですが、もっと根本のところ、本当に将来何がしたいんだ。本人なりの意欲の元ですよ、エンジンみたいなものがちゃんと培われているのかいないのかとか、あるいはそれが、なかなかいえないっていうわけですよ。家庭でも学校でも。そういうことをどう解消していくのかということもキーになるかもしれないです。

### 的野幹事（まなぼーと大原所長）

まなぼーと大原には高校中退あるいは、転学っていうパターンの子が多くきています。その子たちは、学校は行けなくてもバイトはすごく頑張ります。先程、松澤委員の話が裏付けるわけではないですが、多分、主体的に選べる人って、乱暴な解釈かもしれないけれど、バイトと将来の夢が噛み合っていれば力になるのだけれども、バイトとして目の前の何か買いたいものとか、お金を稼ぐことそれが将来を開いていくというところに乖離があるというとなかなか進路にはつながりにくいのではないかと思います。というのもまなぼーとの所長として、作文とかで高校に入るじゃないですか。僕は何回か見てね。非常にいろいろ考えているなと思っていただけでも、そして実際に考えているのだろうけども、そこで作文で書いてあることで僕が感銘を受けていた部分が自分の頑張る力になかなか

なっていない。1つには生活リズムの問題とかもあるかもしれないのですが、バイトとか具体的に何かできるときには力になっても、そのために我慢して勉強するってことになるとなかなか力が出せないとか粘れないとか、その辺のギャップを埋めるための方策ということから進路を考えていく必要があって、そうしないと特に多様な進路選択の中で大事なものを見落としてしまうのではないかなという気がしました。

### 児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）

自分が頑張る力とおっしゃられましたけど、それは大事ですよ。さっきから言っている目標もそうだけど、何があると自分で頑張るのかということですよ。それってやっぱり高校に入った後、そこを続けていく原動力です。だけどバイトはいけるけど学校でそれが発揮できない子は当然学校のほうはどんどんしんどくなっていくのだと思うので、じゃあどうすれば学校でもそうなるのかみたいなことが議論できたらいいなと思います。とりあえずどうぞご自由にご意見をいただければと思います。

### 関委員（中学校校長会）

まず、進路について子どもたちの相談に乗る時のスタンスですが、教員には生徒・保護者に寄り添うというスタンスで進路選択についてはしましように話しています。子どもたちや保護者の考えや意向に沿っていく、それに合わせて適切な情報を提供していくところを第一に捉えていきましようとして指導しているところです。相談では子どもたち自身が自分の将来のことはわからないという様なことも事実です。例えば卒業期にあたる12月位ですけれども、3年生全員に校長はどこの学校でも面接を行なっています。その面接は生徒と校長の対面でおこないます。例えば、高校に行ったら何をしたいとか、進路のことはどう考えているのかとか、将来の夢とかを聞きます。大体、進路のことを、将来の夢をしっかりと語ることができる生徒は高校についても辞めることはほぼないと思います。ところが、高校に入ってから、自分になりたいことを見つけないとい

う生徒も半数ぐらいいるのではないかなと感覚的には思っているところですが、また保護者の中には、とりあえず高校はいかせたいという方や、高校選びにどうしても大事な要素として、学力がありますので、学力のみで高校選びをする保護者の方も当然いらっしゃいます。でも、学校としては、やはり学力だけで選ぶのは。学力の場合は高校の学習についていけないということも当然考えられますが、高い学力のお子さんの不本意入学、第一志望に入れず第二志望に進む場合なんかは、生徒は入ることがすべてだったのに目的を失ってしまうということもあります。そういった意味で保護者の方には学校の雰囲気はどういう雰囲気なのかということを理解して、入りたい学校を必ず訪問して本人との話し合いもしてください。入ってからこんなはずではなかったということだけは避けてくださいとお願いしています。そうしないと入ってから自分の目標を見つける場合には、お子さんはこんなはずじゃなかったと入った後、またモチベーションを下げることにもなります。それらは避けたいのでこんなかたちで相談を進めていく、保護者や生徒に寄り添うということはこのようにとやっているところでもあります。

#### 児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）

やりたいことを見つけるために行くっていう部分で、実際は大学に入ってから探すという子も非常に多いのですけども。一番初めに不適應気味になる子は大学生にもいるので一緒だと思いました。やっぱりそういう上手く合わない場合には、こんなはずじゃなかったと辞めちゃうかもしれない。学校の雰囲気だとか何だとかは、中学生やその保護者の方は学校に行ったり説明会に行ったりしたらわかるものなのですか。

#### 関委員（中学校校長会）

私自身、娘の高校選びに付き合いました、私も教員ですから学校の雰囲気は見ればわかりますし、先生方の対応の仕方、この学校は一番いいよねとか、あるいはここはだめだなあとかわかりました。例えば、スクールカウンセラーが必ずいますよという学校はあ

ります。ですがスクールカウンセラーの方が、きちっとした対応をしてくれるかどうか重要ですし、子どもたちが困ったときに本当に守ってくれる学校なのか、あるいは義務教育では無いのだから、進路選択を変えてもいいのだよとすぐに言ってしまう学校なのか、そういったところはなかなか保護者も聞けないことですが、実はそこが1番重要なんじゃないか、つまりいた時に支えてくれるという学校だったらよいのだけれども、そうじゃない場合はきついかなどと思います。

また私たちが特に心配するのは、スポーツ推薦で入学をしたお子さんについてです。スポーツを続けていければ、学校に3年間在籍していられます。でも万一、怪我をしてしまった場合には、その高校での自分の存在価値が何なのか、わからなくなっていくような感じがする。そして、周りからも、言葉が悪いですけども、スポイルされることもあるかもしれない。そんなこともあるので、スポーツ推薦で進路を希望されるお子さんについては、相当覚悟しなさいと助言しています。

### 児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）

学校をちゃんと見て理解しておくということは大事なことなのですけど、でもどうしたらできるのだろうというところは、こういう機会をもっとつくったらいいのではみたいな提言があってもいいなっています。大学も一緒にオープンキャンパスに来たってそれだけじゃ絶対にわからないこともあって、入ってみたらやっぱり違ってたということを、みんな思ったりすることもあるわけで、じゃあそうじゃないというと、どういうことをすればそこが見えるのかについては、もちろん先輩の話を聞くとかいろんなことがあり得ると思うのでそれは、大学に入るときの高校生のやっていることと同じかもしれません。そういうことが、もっと身近になればいいのですよね。中学生って自分だけではそこまでしないと思うのですけども、多少のお膳立ては周りや地域がやってあげて、ちょっと気楽な感じで先輩の話が聞けたり、そうすると学校に行って肌で感じた五感で感じた部分があると思うのですけども、それとはまた別で、生

徒の立場の人がどんなこと言っているとか、そういうのも見えてくるかもしれない。色々と想像が膨らみます。

### 松田部長（地域教育力担当部長）

昨年度の専門部会の方でも、その不登校のお子さんたちの進路を決めるというのは非常に重要ではないか、そここのところで十分に検討し尽くせないと結局その後退学してしまうケースがあるのじゃないかという意見が出ていたり、後は説明会で経験者の体験談を聞けたらいいのじゃないかというお話が出ていたと思います。その後、7月13日(土)に、初めて教育支援センターの方で「不登校の子どもの気持ちと進路選択」というセミナーをやりました。その結果、60人以上の参加者があり。参加者はフレンドセンター(適応指導教室)に通っているお子さんやその保護者の方とか、スクールソーシャルワーカー等の支援者として関わったり、関心があったりといった方、フレンド以外でもお子さんが不登校であるといった保護者の方がいらっしゃって、60名といったところなのですけども。この中で体験者というのが、高校1年生だったのですけども、自分がどのように進路を選んだかということについて16項目について1時間位、話をしてくれました。その中で、自分が入れる学校という見方より、卒業できる学校を選ぼうと思ったということをお話していたり、あとホームページをしっかりと見ようということをお話してました。例えば、UDフォントを使っていると、きっといろんな人を広く受け入れようというふうに考えているのじゃないかというふうにおっしゃってたり。自分の状況というのをしっかりと見極めて、自分にとっての授業形態はどのようなものがあるのか、それをすごく見てきた。学校の様子も見たし、先生方の話も聞いた、そういうことを色々とお話してくださいました。他には桐ヶ丘高校の校長先生の話と東京都の認可私立通信制高校の方による通信制の仕組み、サポート校の仕組み、要件とか料金について説明がございました。まだ非公式というか十分にまとまっていないみたいですが、アンケートをこの時とっているのですけれども、アンケート結果としては、内容としては非常に参考になった、これは本人だろうと思うのですけ



ども体験者の話が共感でき、自分に少し自信を持って、背中を押されたような気がしたとか、自分の子どもはなかなかそこまでいかないかなと思うのだけでも非常に参考になったとか、自分自身が今、桐ヶ丘を目指しているのでどういう所なのかというところがわかってよかったというようなお話がいろいろあったり、全般的にはこういう機会を年に何度か持ってほしいという意見が出ています。これまであまり不登校また不登校傾向のお子さん、その保護者へ向けた特化したかたちでの説明会みたいなものは開いてなかったもので、一度こういうかたちでやってみて、これからも少し研究しながら実施していくというのは意味があるのではないかなという気がしました。また、公式に報告があると思うのですが、一度やってみての感触はそういう感じでした。

#### **松澤委員（教育委員）**

皆さんのお話を伺っていて感じたのは、不登校の方とか今悩みを抱えて中途退学をしちゃう人たちは、決めたところで頑張るっていうところを目指すのか、決めたところを変更して、違う道を行くっていうところを目指すのか、先生がおっしゃった進路指導の所でも、色々と幅が出てくるのかなと思いました。例えばですけど、先生が進路指導をするときに親御さんが違うところを選ぶとか、何を言いたいかという、その子に合った学校を先生が進めるにもかかわらず、保護者としては学力が高いところを目指して欲しいというケースの場合、子どもとマッチングしていないと思うのですよ。でも、子どもの性質を3年間みた先生が勧めたところを親御さんもその学校いいですねと言ってくれたとしたら、結構マッチングするのじゃないかと感じたのですけれども、それが現状どうなっているのかということをお聞きしたいなと思います。

#### **児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）**

先ほども学力という問題についてはまわるというお話もありましたし、中学校現場のお話を伺ってもよろしいでしょうか。

### 関委員（中学校校長会）

中学校の先生からこの学校にしませんかという話は基本的にしないのではないかと思います。ただし、同じ学力の範囲に3つ、4つ候補があった場合に本人にアドバイスをするという視点で、ここは部活動に力を入れているから興味があるならというふうにはサジェスチョンすることはあります。でも、そこまでです。私が現役のときには、保護者が「先生、この中から選んでください」ということもありましたが、今はそんなことはないので、寄り添ってサジェスチョンするということです。

### 児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）

それで、上手に親御さんとお子さんが合意できてそこを選べたらいいのですが、それだっていやもしかしたら違うところということが当然あるかもしれないです。ちょっとでもレベルが高いところへという価値観が親御さんに入っていれば、先生が言わなくとも、そういうこともあり得ます。もちろん高校に入ってから、転学みたいなかたちで、違ったと思ったら積極的に次を考えるっていうのもありだと思います。けれども、そこまで話を広げると選択という枠を外れてしまうので、高校に入ってからのもありますけれども、可能ならマッチングが良いところに行けたほうがいいわけなので、そのためにはどうすればみたいな議論をできたらいいなと思います。先程の「不登校の子どもをターゲットにした進路選択の説明会」って、昨年、専門部会をやった甲斐がありました。しかも、60名も参加者があったということからもニーズはあったのだと思います。

### 松田部長（地域教育力担当部長）

他県で不登校を地域別に分け、保護者をターゲットにした説明会を開いているという情報から、同じような取組みを板橋区でできないのかなと、教育支援センターへ働きかけたところ、早急にご対応いただきました。開催時期もできるだけ早く、夏休み前にやったほうがいろいろ回ったりできると考えていたのでよかったです。今回

は、中学2、3年生あたりをターゲットとして開催したのですが、アンケートには小学生ですとか、もっと若い人たちに向けてやってほしいという感想もいただきました。

#### 児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）

そうですね。進路選択期ということに絞る必要はなくて、早期に様々なことを知っておくというのは良いことだと思います。

#### 野幹事（まなぼーと大原所長）

ここまでの議論を聞いて、山本委員に聞いてみたいことがあります。先ほども出ていましたが、やりたいことを見つけに行くというのは、まなぼーとに来ている転学した子や中退した後にとってはすごく積極的で良いことなのだと思います。ただ、繰り返しになってしまうのですが、自分が実感として頑張れる子と抽象的に頑張ろうとする子には乖離があって、そういったあたりに関してはそういった子たちと山本委員は付き合いがあるでしょうから、今の議論に出てないようなことってないか、また、どんなふうに思われているかなということをお聞かせください。

#### 山本委員（NPO法人青少年自立援助センター）

松澤委員の話聞いていて思ったのですが、今地方の家庭訪問などに行っているのですが、だから今15歳だとか。関わっている子も15歳、16歳から20歳とか、中学時代から不登校でした。高校も入学式から行けていなくてというような子たちと比較的関わっています。確かに個別に関わると何回かまでは警戒心が強いのですが、私たちは一緒に生活しているので慣れてくると自分の気持ちや、興味があることを話してくれる子が増えてきます。その中からさっきもおっしゃったように、前に話していたこの子聞いているのかなって思うような雰囲気なのに、アンケートをとってみるとしっかり自分の意見が書いてあるとか、表面上はしっかり聞いているような子よりかはしっかり振り返りができていて、そのギャップに驚くことがあります。ただ、どうしても表面上は聞い

ているように見えないので、周囲の評価が下がっちゃうところだなと思って見ているのですけども。個別に関わっていくと彼らなりの思いがあったり、彼らなりの言葉できっちり話してくれるのですが、やっぱり一様に集団が苦手とか、新しい環境に馴染むまでに非常に時間がかかります。自分を見てくれる人がいれば大丈夫なのだけれども、スタートダッシュを上手くできないのでなかなか馴染めずに学校という枠の中に自分の居場所を見出せないまま、みんなが進んでいる集団ができていると、学校へ行けなくなってしまう。説明をしていても、反応の良い子って私たちが話した言葉とかに彼らなりの想像力や経験を働かせることができるのだけれども、私たちの関わる子どもたちの多くが、言葉をそのまま受け止めるだけなので、そこに広がりがないというか表現も上手くなくて、受け取る力もあまり高くないなという印象があります。それこそ個別に丁寧に関わってあげて、こんな質問していいのですよねとか、こんなこと聞いてもいいのですよねということがよく返ってくるのですけれども、ある子はなんでも必要なものを持ってきなという、必要なものはなんですかと聞いてくる。だから、状況を見て判断するとかいうことに関して、聞き取る力が強くないので、集団に対して話していることとかがキャッチできなかつたりします。一人ひとりに個別に関わるのは難しいのは重々承知なのですけれども、そういった子たちが一定数いる事実を考えると、丁寧に付き合っ、特に入学したての時とかちゃんと関わってあげることで、その子の居場所ができればそれがスタートかもしれないけれど、ある程度根付いていける子もいるのではないかと思っています。「隣に座った子がすごい茶髪の子で、その子といるのは無理だと思いました。」と言ってもう行かないという子がいたり。高校入学後、先生が1学期の時にこのぐらい分厚いレポートを出してきて、これを全部やったら卒業できるからねと言われたということをお母さんがおっしゃっていて、これさえやれば卒業できると思うのですけれども、学校に行く動機付けがないのですよ。だから高校生にはなりたい、高卒は欲しいのだけれども、先生これだけですよとお母さんが、これだけやればできるってどういうことなのでしょうね。でもそれさえやれば、大学と

いう次のステップに行けるのだとしたら、それは1つありだと思っただけけれども、学校に行くっていう動機付けがそれだけやればいいということ以外に無いので、やはり学校に持っていけない、学校に行くというところに親として持っていけない。で、15歳で完全に引きこもっているのですけども。彼らのいう高校生にはなりたいというのは中学生の時はそう思っているのですけども。でも、ひもといってみれば友達が欲しいとか、高校に居場所が欲しいとかそういうことが色々と含まれているだなぁというのがやっぱり高校生になれたのに、あんなになりたかった高校生になれたのにいけなくなっちゃうのはなんでだろうかなと思うと、いろいろと高校生になりたいというところに何か意味があるのだろうなというふうに思いました。ちょっと答えになっているかわからないのですけれども。

#### 松澤委員（教育委員）

山本委員の意見を聞いて、思ったのですけれども、小学校入学前に子どもがいじめられた時に言われた言葉と一緒に、子どもがいじめられた時って学校いけなくなっちゃったりするじゃないですか、その時に先生から言われたのが、その時に戻すということです。もう進んでしまうじゃないですか、行かないあいだに。その前に戻して進ませることによって。だからみんな経験がないと思うのですよ。経験が少ないことによって、茶髪の人と隣に座る経験がないってということですよね。経験していれば、全然普通じゃないですか。外国人と一緒にいたら、茶髪もいればチリチリの人もあるわけじゃないですか。でも、それが普通だってなるので、その経験値が高い子は全然いけるのですけども、経験値が少ない子はやっぱり引きこもったり、1人になったり、今すごくわかりやすかったのですけれども。だから経験を積ませてあげる前の状態からちょっとずつ経験を積ませていく。親御さんにも全然大丈夫ですよ、まだ間に合いますよっていうふうにゆっくりとやってあげるといのがああいったスタートラインに立って。いろんな人と触れ合っているといたところからスタートするということでもいいのじゃないでしょうか、その子の状態によって。その子は例えば全員高校生ですけども、小学校1

年生かもしれない大学3年生かもしれないすごく差があって、ドンとくるかもしれませんが。だから年齢として考えたら、そうですけども。その子の実態をよく考えて、深く付き合っている人にはそういった足りない分が見えるわけですよ。逆にこの子すごいなって思う時もあるでしょうし。それをちゃんと見極める時代になっているのかなと思って、それをどういう風にあるかというのはわからないのですけれども、今、その子に足りないものは経験だったのじゃないかなあと思う。

#### **山本委員（NPO法人青少年自立援助センター）**

一緒に住んでいるので、毎日経験を積む中で、できなかったことが、できるようになるというのを目にしていく。学びというのは勉強だけじゃないということを生活の中で実感しています。

#### **松澤委員（教育委員）**

今おっしゃったように、中学まで集団の中にいますけども、集団にいないのですよ。私もそうなのですが、お花を何千鉢と育てていて全ては見られないし、入り口に近いうちはすぐ目につくから手を入れられるけれども端っこの方には手が届かない。ただ、それは手が届かないけれども成長していくのですが、ふと気がつくとうちに食われたりするのですよ。それと一緒に見ているようで見てないってことなのですよ。でも、高校には入れちゃう、だけど経験がないということはどうするかということをやっぱり考えていくということが大切なのかなと、今すごく思いました。

#### **梶野氏（東京都教育庁地域教育支援部 主任社会教育主事）**

山本委員がおっしゃったように私も社会教育の立場の人間なので、今まで中途退学の話ばかりしていましたがけれども、やはり学校だけではない学びの場というのがどうつくれるかなというふうなことを捉える必要があると思います。学びの場ということを松澤委員がおっしゃっていたようにベースは経験値をどう上げていくかということですよ、自分の足で立つというか、自立するということ。

自己決定する場面をどうつくっていくかというようなこと、そういう機会をどうつくれるかだろうなど。それは個別にやらなきゃいけないこともあるだろうし、グループとかいろいろな集団の中で学ぶこともあるだろうというふうなことを思いました。いくつか議論のキーワードとして、私が中退している子を見ていて思うのは先輩や社会人のロールモデルがないということです。関係性やつながりが弱い、受容される経験が乏しい。社会体験、生活体験の機会が圧倒的に少ない。そういうことから多様な価値観に触れる機会もないというあたりが多分キーワードで、そういう場面を作って自己決定していくという経験を自分で積んで、それが自信になっていくというふうに思います。

#### 児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）

従来のように、家庭があって学校に行って、中学からそのまま高校に行ってその合間合間にいろいろな指導や支援を受けてという枠だけだと、ちょっと上手くいかないというか、もっと幅広いところでいろんな大人が関わって、いろんな多様性を見せてみたいなのがきっと必要なのだろうと思います。もちろん、学校は学校で努力されていますし、先生方は一生懸命やられていることも知っていますが、やっぱり社会が変わってきたし、子どもたちも変わってきている中で家庭、学校そのまま高校というふうにだけではすっといかない子どもたちもたくさんいるということを受け止める場所、その意味での地域ってすごく大事ですよ。いろんな立場の大人が一人ひとり関わってあげるみたいなことがすごく大事だと思うし、集団とか人間関係が苦手な子であれば、それは確かに。学校の中にいながらにして、人間関係を頑張れなんていっても無理なので、ちょっとだけ外れたところでそういうことを経験させてあげるということが全然あってもいいんじゃないかというふうに思います。実際にも、そういうことがあるなというふうに改めて思いました。

### 松田部長（地域教育力担当部長）

まさしく、社会教育という言葉が出てきたのですけども、この中で経験談を話された方も、学校へなかなか行けなかったのですけれども、社会教育施設につながってそこで自分のペースで通うなかで、その職員と話をしたり施設でやっているイベントに自分なりのかたちで参加するようになった。そういうことをやっているうちにだんだん自信を取り戻すことができ、自分のことを考え進学の道を自分のあったところにということをやりだした。それがまたとても興味深かった。学校教育と社会教育という経験をしながらきたということ。

### 的野幹事（まなぼーと大原所長）

実はその子は、僕がまなぼーと成増の副所長時代に来た子です。僕は彼女に1つのことしかやってあげられなかったのですけれども。それは区役所のグランドピアノが1つ余った時に、当時ピアノをよく弾きに来ていて、彼女のためにグランドピアノを譲ってもらったところ、すごく喜んでくれたというのが、唯一僕がやってあげたことになります。

### 梶野氏（東京都教育庁地域教育支援部 主任社会教育主事）

君のためにやってあげたのだよというふうに、その子は捉えるわけですね。

### 児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）

卒業できるかどうかで学校を選択するとか、UDフォントを使う学校は受容性が高いとか、普通の子が自分で学べることでは無いと思うので、その子は大人とちゃんとつながりを持っていますよね。そういうところを、学校的学力とは違うかもしれないけど、ちゃんと身に付けてものにしていく子だなと感じたので、やっぱりそういう強みというものもあると思いました。



**山本委員（NPO法人青少年自立援助センター）**

今日、まなブースの子どもたちが来ているのを見ていて思うのですけど、高校というところで余り選択ということをしせずに、大学というところで初めて選択ということをするのかもしれないのですけれども、その経験は小・中ではあまりないなというふうに思うのですよね、何かそういうふうに本当に経験につながるような小さなことでもいいから自分で決めていくとか、選択していくという作業って本当に小さなことでもいいのでしょうか、幼い時からあると高校選びとなった時の途中にある一線上にあるなと思うのですけれども。だから選択するという時がある日突然やってくるのだろうなあと思うと、できる素質を持っている子はいいののですけれども、できない子にとってはすごく大きなことなのだろうなと思いますね。

**梶野氏（東京都教育庁地域教育支援部 主任社会教育主事）**

自己決定の積み重ねみたいな、小さな場面をどんどんステップをたどっていくみたいなことだと思いますよね。

**的野幹事（まなぼーと大原所長）**

行ってからやりたいことを見つけに行くそういうことを地道にやっていく場所なのだということをお大事だと捉えて応援してくれる学校だったらそれでオッケーだと思うのですけども。

**児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）**

自分でどんどん選択して、また違って構わない。

**的野幹事（まなぼーと大原所長）**

今、高校や大学へ、作文とかで入れるじゃないですか。だから、すごくいいことを書くのですけども、それと入学後の自分の実感にギャップがあるから中退してしまうのかなって考えると、むしろ今ここで話しているような小さい実感を持って、確かに僕はこの道だったら頑張れそうだということが見えるような、丁寧に付き合える進路の選択の支援ができないかなという気がします。

### 児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）

浅賀幹事、皆さんの御意見を聞いていかがでしょうか。

### 浅賀幹事（板橋福祉事務所所長）

皆さんの意見に大体集約されるのじゃないかなと思うのですが、まずは学校中退するというその時点で、いろいろな要因があります。学力がついていかない、友達関係、そういうかたちで自分が考えている場所ではなくなってしまったということで、そこから身を引いてしまうということが、退学という現象につながっているのだと思います。なぜ、そういうことになるのかというと、先ほど山本委員もおっしゃっていたように、皆さんも小学生だった頃を思い浮かべていただきたいのですが、小学校の卒業式に皆さん夢を語るのですが、なにになにか何になりたいとかその時は自分の進路を思い描いているのですが、中学校に入り勉強に追われ、そのうちに学力というものが立ち足らなくなってきて自分の夢というのを忘れてしまう、見えなくなってしまう。そして、仕方なく高校という手段を選ばざるを得ない環境に置かれて、自分の望みではなかった学校に行かされて、そこで現実と理想のギャップにはまってしまって、そこに適応できずにそこから外れてしまうという現象になる。その時に、今一度原点に帰らせてあげる。あなたは将来何になりたかったのか、何をやりたかったのか。それに向かって今はこういう勉強したほうが良いということを書いてあげられる大人が今のところ少ない。原点を振り返って自分の夢を思い出すことによってやらなくてはいけないことが必然的に見えてくると思います。そういったサポートも重要なのかなと思います。そして高校を中退したからといって、社会から外れるわけではないということ。例えば料理人になったり、美容師になったり、いろいろな手に職を持つという方法もあります。そういう道もあるということを示さないと子どもたちは行き場をなくしてしまう。ですからそこら辺もぜひサポートしてあげたら良いのではないかなと私は感じています。今、伺ったお話の中で、どうしても学校というものはやめてはいけないという固定観念があり、確かに社会に出たときハンデが大きいです。た

だ、一流の料理人になるのだとか、そういった夢があってもいいと思います。学校だけが全てでは無いというイメージも1つ示してあげるといかがかなというふうに思います。

#### **児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）**

最後のところはまさに居場所ですよ、居場所っていうのは小・中学生の不登校の子どもたちのためだけの場所ではなくて、高校を辞めたってどっかにそういうところがあって、違う道も含めてやり直しができるというのは、居場所という考え方を発展させていくとそうなるのだと思います。せっかく盛り上がってきたところですが時間です。いろんな貴重なご意見をありがとうございました。狭い意味での進路選択や情報提供をどうするかについてだけ議論してもしょうがないので、もっと幅広く根本のところをなんとかするという議論、家庭から学校へとといった直線線上のところだけではない地域や社会教育も含めてどうできるかっていうのが大事だという点、大きく押さえられたかと思いますので、ここは1回閉めさせていただきたいと思います。

#### **【研修室Aへ移動】**

#### **諸橋課長（地域教育力推進課長）**

それでは議事2として、只今の討議内容の発表と各座長の総評をいただいた後、意見交換会を行いたいと思います。それではAグループの発表からよろしくおねがいたします。

#### **【Aグループ発表】**

#### **諸橋課長（地域教育力推進課長）**

それでは、平戸委員より総評をいただきたいと思います。

#### **平戸委員（東京家政大学人文学部教授）**

大胆なチャートで問いを投げかけたわけですけども、そもそも

「不登校が問題なのはなぜか」というあたりの投げかけが果たして本当にそうなのかというあたりが非常に印象に残りました。私どものほうも申し上げたのはBグループとのつながりでいえば、子どもたちの将来に向けてのチャンスをいかに保障していくかというあたりだと思います。そこにおいては今まで親御さんとしては学校に戻ってほしいというようなことが前面に出てきてというところがあったようなのですが、そうではなくて些細な進路選択のチャンスを提供していく、好きなことから入っていったいいのだよという再スタートを切ることをもうされているのですが、そういうところをすごく心強くお聞きしていました。意見としては出なかったのですが、お願いしたいのですが親御さんにもいろいろな状況があり、子どものことが二の次になってしまっている親御さんもいますし、すごく一生懸命になっている親御さんは子どものチャンスがどうかあると思いますが、もっと単純で当たり前のことを当たり前にしてあげたいというか、学校に行っていくという状況が大多数の子ができていく状況で、なんでうちの子はいけないのだろうというあたりの素朴な何か考え方もあると思います。私は、だから親御さんがダメだじゃなくて、その親御さんの気持ちを受け入れながらもひきこもって誰とも接点がなくてチャンスを失っている子どもさんに関しては、今ある施設がこれだけあって社会資源がこれだけあって、それを使っていいのだというあたりとか、自分のチャンスを増やすためにこういうのがあっていいのだというあたりをもう少し、やはりせつかくこういう会が立ち上がったわけですから、それこそ情報の一本化を工夫をしていく中でさらにはそのお子さんの状況によってこちらから伝えていく方法、伝える行き方とかを検討していくことで、まずある資源を効果的に使っていくということがすごく大事ではないかというふうに思いました。さらなる充実ということに関していいますと、まだそこまで意見が出なかったのですが、様々な立場からというご意見もございましたのでそこら辺も次回へ吸い上げていければと思っております。

**諸橋課長（地域教育力推進課長）**

ありがとうございました。続きましてBグループの方の発表をよろしく願いいたします。

**【Bグループ発表】**

**諸橋課長（地域教育力推進課長）**

それでは、児美川委員より総評をいただきたいと思います。

**児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）**

出たご意見は今ご紹介いただいた通りなのですが、まず大前提に中途退学は問題なのか、まして中途退学は小・中の義務教育段階ではなく、高校ですので、そのこと自体が問題というわけでは無いけれども、ただそのまま立ちすくんでしまって、次につながらないみたいな状態はやはり不味いので、そうならないためにということが、議論の出発点の認識としてはあるのだろうということです。最初に僕の方でもふりましたけれども、要するに進路選択のあり方と多様な進路選択の機会の提供みたいな話だと、とにかく学校選びとか情報提供とかそういう狭い話になりがちなので、だからそこだけじゃないところをぜひ話しましょうということで議論をお願いして、いろいろなご意見が出ました。中身については先ほどご紹介いただいた通りなのですが、私なりの観点でまとめると3つくらいの柱があるなということで、1つはやっぱり子ども自身が中途退学するかもしれない、あるいはそういうリスクがありそうな子どもが、それでもどうやって高校を続けていくかみたいなものの動機付けとか、高校に入る時もありますけれどもやっぱり行ってみたら違うなって思っていたとしても、そこをどう続けていくかという動機付けの力みたいなことをどう持ってもらうか、先程から出ている将来何がしたいのかという目標だったり、自分自身がどういうかたちでなら頑張れるのかという頑張れる力みたいなもの。あるいはロールモデルを知っていて、そこを参考に選べるんだみたいな力ですね。どうやったら続けられるのかっていうこと、本人が持つ力を意識したいと

いうことが1つ。

2つ目は、ですけれども、そういう将来の目標だったり、ロールモデルだったり自分が頑張る力だったりみたいなものをどこで身に付けるかということだと思います。その場合に家庭や小・中学校での教育というのも大きく役割を果たすと思いますけども、主として議論に出たのは家庭や学校はもうギリギリまで頑張っているわけで、ただ、そこだけで収まらないし、支援しきれない子どもが現実にいるのは事実なので、そこはもっと社会教育的な営みや取組みだったり、地域の出番であったりということによって学校だけではない学びの場みたいなことを、とくに今の子どもたちは経験が少ないわけで、その中で多少の困難に当たっても自分で乗り越えて自信をつけていくという様な、そういう機会がなかなかなくて、それを学校生活の集団行動の中で全員へ一色くたにきめ細かく提供するというのは、難しいわけですから、そういうのはむしろ地域側の出番かもしれないということです。先ほども申したような動機付けとしての将来の目標であったり、自分が頑張る力や頑張れる力みたいなものをつける場として地域のそういったものがもっと豊かにあっていいなあ。そういうことが実は高校中退しなくて済むようなことにつながるのかもしれない。集団とか人間関係が苦手な辞めるとかそういう子もいるわけですが、やはり小・中学校へ同じように通って、人間関係に強くなれと言われてもなかなか厳しいと思います。そういう場合には学校では無い場所でちょっとずつ経験値を上げていくのがいいのかもしれない。そんな議論がありました。

3つ目は、そういう力が必要でそれを育てる場として、家庭・学校はもちろんであるけれども、それをさらに幅広く包み込んだ地域の力や社会教育的なもの、そういったところを踏まえた上で最後はもう一つそれでも、どういうふうに高校を選んでいくかみたいな学校の見方というか、見極め方というかその子に合った学校を本人もですし保護者もですが、どうしたら選べるのか、みたいなところが最後の出口のところでの、議論としてあるのかなあということです。例えば先日、行われた不登校の子をターゲットとした学校説明会をやったら割とニーズがあったとか、そういうことをやれる範囲

でということではできると思っていますので、その問題があるのかなあと思っています。

ただ、さっき向こうの議論では出なかったのですが、僕が気になっているのはそういう学校の選び方みたいなもの、その子にふさわしい選び方をどうするかというときに、多分中学校はご発言もあった通り、そんな無理強いはしないと思います。多少学力とかを気にするにしても。しかし、学習塾の様なところは、おそらく無理強いはしないまでも、あなたはそこの学校は行ける、行けないという合否判定をはっきり言っているわけです。そういうような問題だとか、あるいは私立高校は私学についての授業料助成が、始まって以降、公立高校の生徒をどう食っていくかという話に向かっているわけですから、当然私学はそういうやり方をしているわけです。子どもや保護者にはそういう情報も当然届いている。しかもそれは別に全日制の私学だけではなく広域通信制みたいな学校もそうだと思うのです。もちろん広域通信制を否定するわけでは無いですが、でも本当にその子に合っているのか十分吟味されていなくて、良い場面はたくさん見せられていますよね。そういう中での進路選択になると思うので、先程言ったような地道なレベルで取組むということ、しかし世の中では支配的な価値観になっている学習塾の宣伝とか私学の売り込みみたいなものにどう対応していくかという問題も、一つあるのかなという気がしました。

#### 諸橋課長（地域教育力推進課長）

ありがとうございました。それでは最後に残りの時間を使ってこの2つのテーマを一体的に考えたいと思います。フリーでお話しただけであればと思います。ご意見ある方どうでしょうか

#### 齋藤所長（まなぼーと成増所長）

高校に入学する際に、中学校卒業後の15歳で入学することを前提としない入らなくても良い仕組みがあるのか、ないのか、また今後、そのようなかたちになっていくのか。15歳で高校に入学しなければならないような前提が続くと高校に進学し、卒業することがし

んどいかもしれない。そこで中学校卒業後1年バイトしようとか、他に何かしようとかして、高校に進学をするという選択肢が取れるようになるのか。

**梶野氏（東京都教育庁地域教育支援部 主任社会教育主事）**

考え方としては本人の気持ち、目標が設定されてからいってくれた方がありがたいというのが基本だと思います。子どもたち自身の選択として、まず高校へ進学したいというには言います。遠回りしても自分のやりたいことを考えたいって子はある意味自己決定力が高い子だから、それを尊重するというのはそれでいいと思います。ただ、大概の子はどんな状況でも高校には行きたいと言います。何がしたいとかではなく、みんなが行くからだとか。不登校の子でも行きたい、その中にはやり直したいという意味も含めてなのかもしれないけれどあるわけですよ。今日、進路指導の話を聞いてびっくりしたんですけども、中学校ってこんな寄り添い方の進路指導するのかということ、やっぱり学校の先生たちだけでやるのではなくて、多様な社会とか大人が関わる場をどう作るかということの方がそういうふうなことから考えた方がいいのかなというふうに個人的には思います。

**諸橋課長（地域教育力推進課長）**

関連して1個だけ、平沢所長にお伺いしたいのですが、先ほどフレンドセンターは決して学校に戻すための場所ではなくていいのじゃないかというお話があった中で、フレンドセンターに通う子どもたちは高校を目指すのですか、それとも、その選択も自由なのですか。

**平沢所長（教育支援センター所長）**

中学3年生でフレンドセンターに通おうとする生徒たちの大部分が、高校には行きたいと思ってきています。



### 諸橋課長（地域教育力推進課長）

高校を目指していくわけですね、ありがとうございます。

### 野幹事（まなぼーと大原所長）

居場所についてのAグループと追究が重なっているなど思ったことなのですが、そのスイッチを入れるということをどうやっていくかというあたりがすごく重なっているなと思いました。省略されちゃったかたちなんで、スモールステップという話がずいぶんこちらの方で大事だという共感がグループとしてあったと思います。つまりは目標としてすごく立派な目標を出させるようなシステムが動いている。高校でも大学でも作文を書いてそれが立派だとそこに行けるのだけでも、でもすごく良い作文を書いた子が、転学するというケースは結構あります。それはなんでなのかなというところとスモールステップで実感として自分がこれをしていくのだということと乖離している部分があるのかなという話が出ていた。多分居場所の中でも、まさに居場所というのがそのスモールステップをどうやって積めるのかということになってくると、この進路選択という部分と噛み合ってきて相乗効果が出てくるのではと、今話を聞いていて思いました。

### 松澤委員（教育委員）

多分、議論が深まれば深まるほど、答えというものは見つからないんじゃないかというふうに思います。皆様のご意見を聞いて、やはりその子によって問題は違うわけですが、不登校のお子さんがいれば、不登校から高校に向かったけれど、退学してしまったり、転学をするってところで答えというものが無い世界の中で、自分の選んだ道を信じて進める、最後は自分を信じる力になるのかなというふうに思います。そういうところを今後、どうやったら子どもたちがそういう気持ちになっていけるのかなということを私自身は課題として持ち帰っていかうかなというふうに思いました。皆様のご意見は皆さんの立場立場で、全然違うのですが、板橋の子どもたちを含めた社会にいるお子さんを、悩んでいる子た

ちを救いたいという気持ちはみんな一緒だと思うので、そういった面で行政としてそこで何ができるかということを経験していただければいいのかなというふうに思いました。

#### 諸橋課長（地域教育力推進課長）

居場所の話の中で、学校に行けてない子たちは、学校に戻るべきなのか、そうではない別の道もあるのかということは、すごく大きな話だと思います。親の気持ちに立つと、戻ってもらいたいという気持ちもわかりますし、自分に置き換えた時に不登校の子どもに対して、大丈夫だよと言えるのか、日本の社会の仕組みの中で学校に戻った方が幸せになれるのかについては、非常に難しく私の中でも答えは出てないです。自信をもって「大丈夫だ、こい！」という居場所もあって、そこでしっかり支えてくれている人たちについては大変心強いですし、学校で何とか戻って、もらおうと努力される中で、学校のルートを歩んでもらおうとする、そちらの努力も必要です。それに対して行政はこっちだよとも言えないし、でも、どっちだよと言わないと道に迷った子どもたちは救えないだろうしというところでは、おっしゃる通り答えは無いですよ。そういう中で、今回の提言ではそこに一筋のはっきりとした正解は出せないのかもしれないですが、少なくとも今、道に迷った子どもたちが、生きる力を付けて一人の社会人となって幸せな人生を送るための支援の仕組みとして区が出来る小さな何か、それこそスモールステップみたいなことが示せるといいなというイメージとしてはあります。久保委員はどうでしょうか。

#### 久保委員（フリースクール@なります代表）

いろんな手段と色々な選択、居場所だったり支援だったり選択肢だったり、最終的に経験とかいろいろありますけれどもそれって結局は最終的に何を目標しているのという本人たちが主体的に考えて決める力を身につけることにつながるのではないかと思います。そのためにどれだけの支援を大人たちであったり、区であったり居場所や経験をできるような環境を整えるということが全部そ

の子たちの主体性を育てるというところにうまく集約するのではないかとお話を伺っていて感じ、どうやって皆さんと考えて行けたらいいのかなというふうに思いました。

**諸橋課長（地域教育力推進課長）**

ありがとうございます。浅見委員はいかがでしょうか。学校側からはどういうイメージで捉えていますでしょうか。

**浅見委員（小学校校長会会長）**

お話を伺っていて、最終的には一緒に考えていかないといけない内容なのだということで、スモールステップという言葉がありましたが、我々のほうは居場所ということに絞って考えたのですけれども、進路のことを考えていける居場所といったあたりを考えて行けたらとお話を伺っていて思いました。最初の方の話に戻りますと、不登校が1つの選択肢としてあって、そこにどんなサポートをしていけるかということで考えていかないとダメなのだなど、社会に出るためのベースキャンプなんて言葉も出ましたが、なるほどなあと思いつながりながら目が覚めたような感じでした。そのあたりを大事にしながら子どもたち、それぞれの長い人生ですから、先を見る力をどうやってつけていくかといった視点で、居場所であり進路でありを考えながら、どのタイミングでどんな大人がどのようなサポートをできるかというあたりを整理していくと良いのではと考えました。

**諸橋課長（地域教育力推進課長）**

ありがとうございます。島村委員も地域の視点で総括するとどのような感じでしょうか。

**島村委員（民生・児童委員協議会 主任児童委員部会長）**

現時点で不登校支援をしているお子さんが何人かいます。支援する際、主任児童委員として学びが少ないなということを実感しているところでもあります。支援家庭を何とかしてあげたいと思う気持

ちが強くなり、つい自立の部分までを支援してしまうと、基本的にその家庭の依存度が増してきてしまいます。極端な事例を挙げますと、支援者が朝迎えに来てくれないから学校に行けないということになり、不登校はまるで他人の性となります。家庭で登校出来る様に家庭環境を整える努力をしているか否かという家庭の問題としてとらえられない場合もあり、支援の方法は重要です。また、他の子は学校に行けているのに、なぜうちの子は学校にいけないのか、私は子育てを何か間違ったのではないかと、子育てについて自分自身を責めている親御さんには心に寄添う事も必要です。親御さんは努力をしているが、子どもが求めていることと親が子育てとして努力していることが噛み合わなかったりすると、家庭の中に歪みができてしまったりもします。子どもは直感的に、親が悩んだり困っている姿に対して心を閉じてしまったり、伝えられなかったりする場面があります。時に子どもの心をストレートに聞くといったことが私たちの活動にとって大切な支援の一つでもあると感じます。その上で、不登校支援で朝迎えに行ってから、学校に行くか行かないか行きたいかどうかというところを含め子どもの話しを聴いてから登校する様にしています。もちろん親御さんには区内の居場所として、フレンドセンターがあることも伝えていきます。また、兄弟のある家庭では不思議と兄弟とも不登校になる傾向があり係わりが複雑になります。私学を選択した中学生の場合、学校の先生とは連携が持たず、学校での生活状況など一切不明ですので支援は難しいです。親御さんは保護者間の連携も地域に無いので、学校へ行かせてくれるところに子どもを預けたいと切羽詰まったりします。不登校は子どもだけの問題ではなく、家庭問題でもあります。勿論私たちもスキルを上げて情報を享受し速やかに発信していく必要があると感じています。現在、天津わかしお学校やフレンドセンター、学び i プレイスを見学させていただいているところです。子ども自身が社会の中での居場所を見つけ自立する力を学び身に付けて欲しいと願っています。最近、福祉事務所の力が大変大きいと感じました。都立高校から転学した高校生がアルバイトを始め、そのお金を貯金しています。これは福祉事務所の担当者の力添えのお陰です。何のために

貯蓄をしているかというのと、将来の目標のため、高校卒業後に資格を取得するための準備金です。自分でお金を準備しなければならない環境で一生懸命アルバイトをしながら学校に行き、自分の将来を切り開くための選択ができたことは素晴らしいことです。これは支えてくれる力があったからこそ実現できています。まだ高校生ですから1人では心が折れてしまうかもしれない、どうしていいかもわからなかったはずですが、しかし、そこを支える福祉行政の力は本当にありがたいと思いました。

#### 諸橋課長（地域教育力推進課長）

時間もオーバーしてしまい、みなさん全員にお聞きする時間が無いのですけれども、指導室長いかがでしょうか。

#### 門野幹事（指導室長）

Aグループの中で、教育機会均等法が制定されたことにより、不登校はもはや問題行動では無くなったという意見がございました。それと同じように高校を退学することだけで問題なのかということについても考えなくてはいけないと思います。その観点で進路指導どうこうという話をしていると、この問題は違うのじゃないかと思えます。私たちが子どもたちに身に付けさせようとしているのは、キャリア形成能力というか、そういった力だと思います。なので、今、島村委員がおっしゃったとおり、その子がどのように生きていこうとしているかというもののの中の選択として、学校が合わなければ辞めるという選択肢は当然良い選択であって、それをもって否とするような話は果たしてどうなのかなというふうに感じています。先程の不登校の話もそうなのですが、この進路の話も報告だけで詳細を知っているわけでは無いのですが、お話を聞いていてそう思いました。例えばBグループの話でいうと高校中退させないために必要な育成をしていくという話をするのか、中退してしまった子どもたちに支援する仕組みがないからこれをどうしようという話をしていくのかというところで、だいぶ違うのではないかとこのように思っています。不登校についても不登校って単純に30日以上休

んだら該当するのですけども、学校って1年間で10カ月くらいなのですけども、10で割ると月に2、3日休むと不登校なのですよ。月に2、3日って2週間に1回程度休んでしまうと不登校なのですよ。そういう子どもたちの話をしているのか、本当に全く家から出てこないそういう子どもたちへの居場所づくりを考えていくのか、それとも学校はたまには来るけどなかなか来られなくて様々なところに行っているのだけれども、それでは学習の補填ができないという子どもたちへ、更に補えるような居場所づくりをしていくのかという、どちらの話もターゲットを絞っていかないかとあと1回ではまとまらないのではないかなと感じています。

#### **松澤委員（教育委員）**

今の室長のお話非常にわかりやすい説明だと思ったのですけれども、私ちょっと反対の意見になってしまうのですが、予防とそうなったときの対処といったところで違うのじゃないかなと思います。だから本来学校に行ける子が行けなくなった場合の対処の方だけやるっていうことも私はちょっと違うのではないかと思っています。基本的には学校に行っていたかと思っておりますし、子ども達も学校に行ったほうが良い、行きたいという声もあるわけですよ。ただ、行けない理由というのはいろいろありまして、行けなかった場合にそういったことがあるので、そういう場合にはそういうことにあった対応も必要で、そうならないように予防する必要も、予防というか学校に行ってからキャリアを形成するという方がいいのじゃないかと、全体的な例を見てもそうだと思うのですけれども。けれどもそういったことを目指していくべきなのじゃないかなと私の意見ですけど、一意見ですけどもそう思います。だから、両方必要なんじゃないかというふうに私は思っています。

#### **諸橋課長（地域教育力推進課長）**

ちょうど議論が深まりつつあるところで、もう少しすると何か見えてきそうな気もするのですが、時間の都合もありますので、最後に児美川部会長に次へのつながりも含めてお話いただきたいと思い

ます。

### 児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）

皆さんお疲れ様でした。私、大学の教員なので、研究者ですから1つの正解があるわけではない問いをみんなで探求して、何か考えたと思ったら、さらに次の問いが出てきて深まるといったような議論は大好きなのですけれども。ただ、大好きなのですけれども、それをやっていたら、次回、何かまとまるという気がおよそしないので、ちょっと議論の仕方を考えなきゃいけないなと思ったのです。今ご意見をお聞きしていて要するに最終的には提言といったかたちでまとまった報告にしていくためには、次元を分けなきゃいけないという気がしました。

1つは基本的な考え方みたいなところですね。不登校ってどう捉えればいいのか、中退っていけないことなのか、そうじゃないのかみたいな。そこについて一定の考え方を出さなきゃいけないという気はやっぱりするのですね。もちろん子どもたち若者達が学校という場が嫌で逃げ回って回避したとしても、高校を含めてです。でも最後は社会に出ないわけにはいかないと思うので、そこがゴールだと思うのです。その場合に逃げ回った場合にこういう手段があるし、こういう支援があるし、学校にいった場合にはいった上でもこういうものがあるみたいな、大きな緩やかに包み込むような基本的な考え方みたいなものを出すことがひとつの次元として必要で、その上で2つめにはもうちょっと踏み込んだ各論に入る。どんな力を身につけて欲しいのかとか、どんな支援があり得るのかとか、さっきのスモールステップという話だとか、家庭のこととか。今回、提言の3つの柱の中に家庭という言葉は無いですが、やっぱり抜けませんよね。だからそういった問題だとか問題提起的なのは真ん中のレベルくらいです。1番最後は、3つめですが、1番ブレイクダウンして、具体的にやれそうなことを、区としての具体的な施策・政策みたいなかたちで出す。それはもうほんとに具体的な話だと思うのです。次元を分けなくて、例えば3つ目の話をしているのに、急に1つ目の基本的な考え方を出してきても議論にはならない。そん

なあたりを次回は整理をしながら議論したほうがいいかなど。具体的に今は何もしてない状態だとすると、やれる事はいっぱいあるはずなので、それはそれでちゃんと出しきって何とか今年度を終わりたいというふうに思いました。

#### **諸橋課長**

ありがとうございました。最後に議事3「その他」について事務局よりお願いいたします。

#### **事務局**

-業務連絡-

#### **諸橋課長（地域教育力推進課長）**

次回は9月6日(金)午後6時30分から、場所は教育支援センター研修室となります。次回を経て、提言の素案を取りまとめて、第二回全体会が12月20日(金)を予定しておりますので、こちらに専門部会としてまとめたものを提示するということとなります。その他、皆さん何かございますでしょうか。

#### **【質問等なし】**

これを持ちまして本日の会議を終了とさせていただきます。長時間ありがとうございました。

#### **【閉会】**